



「熊谷市誕生10周年記念」事業

金子兜太 熊谷の俳句

-一句碑建立記念 -

「熊谷市誕生10周年記念」事業

金子兜太
熊谷の俳句 -一句碑建立記念 -

熊谷市・熊谷市教育委員会
発行:平成28年3月30日

熊谷市・熊谷市教育委員会

表紙デザイン:熊谷染型紙(岸家型紙「鶴」「蹴鞠・傘・柳」)

金子兜太 熊谷の俳句 -句碑建立記念-

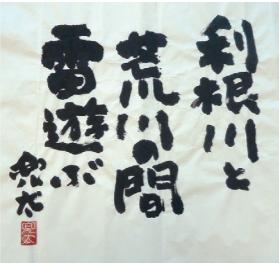
利根川と 荒川の間 雷遊ぶ

【設置場所】熊谷市中央公園
(熊谷市宮町2-39)

この句は、利根川と荒川という二つの大きな河川に挟まれている熊谷の特徴を描き、その狭間にて鳴り響く夏の雷を捉えている。

二つの大河をまたぐ熊谷は、川の恩恵を受け、時には川の脅威と向き合いながら、地域の特色を育んできた。夏の夕暮れになれば、古くから上州と北武藏の風土を象徴する雷が到来し、熊谷にも多くの雷鳴と雨をもたらす。

二つの河川の存在がここに住まう人々の感性や精神に大きな影響を与える、長い時を経ながら熊谷の原像を形成してきた。雷鳴の躍動



感とともに、熊谷に息づく自然の景観と夏の風景を力強く表現している。

7月、熊谷の夏の風物詩である熊谷うちわ祭が開かれる。豪華絢爛なる山車・屋台が華々しい一大絵巻を繰り広げ、各所では勇壮な熊谷囃子が叩き合う。雷が遊ぶように離子と鳴り響き、熊谷はいよいよ本格的な夏を迎える。

利根川と荒川の眺め



利根川 荒川

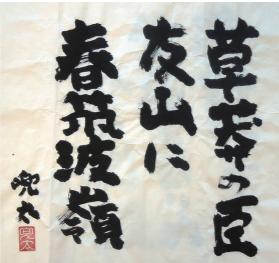
草莽の臣 友山に 春筑波嶺

【設置場所】根岸家長屋門
(熊谷市冨山152)

大里地域を代表する先覚者として名高い根岸友山。在野の立場から「草莽」として、政治に積極的に関わった人物である。友山の生家には長屋門が残され、当時の様子を今に伝えていく。

長屋門の前にある桜が咲き誇る季節、屋敷の高台から東を望む。その春霞の先に姿を現す筑波山と、新たな時代へと踏み出した友山との対比。春の麗らかな日和を感じる中で、屹立する友山の姿を表現した句である。

江戸時代末期、名主として村政を担った友山は自邸内に「振武所」という剣術道場と「三餘堂」という学舎を開き、地域の教育に尽力し



た。その後、長州藩と親交があった友山は、尊王攘夷の志を掲げて浪士組に参加するなど大きな足跡を残した。友山の息子で好古家の武香も学術分野に対する寄与が顕著であり、大森貝塚を発掘したことでも知られるE・S・モースも根岸家を訪れている。根岸友山・武香から新たな時代の暁が大里の地にもたらされたことは、誇り高い歴史の一つである。

根岸家長屋門と桜



根岸友山 文化6年(1809)～明治23年(1890)

熊谷市誕生10周年記念 金子兜太句碑設置事業



熊谷市名誉市民であり、日本を代表する俳人の金子兜太先生に熊谷の風景・特色にちなんだ句を詠んでいただいた。そして本市の魅力を再発見するきっかけとして、また今後の発展を見守るシンボルとなるよう句碑を建立・設置した。

荻野吟子の 生命とありぬ 冬の利根

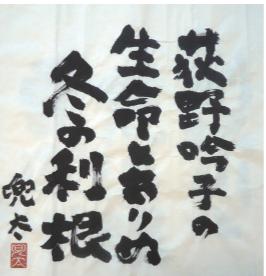
【設置場所】荻野吟子生誕の地史跡公園

(熊谷市俵瀬581-1)

解説

荻野吟子は、嘉永4年(1851)、利根川のほとりにある旧俵瀬村に生まれた。滔々と流れる利根川を望める俵瀬は、川の増水の度に水が滞留する「水場」の村と呼ばれていた。冬の季節になると、赤城山からの寒冷な「赤城おろし」が吹き下ろす。こうした環境の中、利根川の広大な流れとともに吟子の生命が育まれ、その後の人生の苦難を乗り越える原動力となったことを偲ばせる。

吟子は幼児より聰明で学問を好んだ。若くして結婚するも不慮の病により離婚。この治療の体験により女医の必要性を痛感し、医師となることを決意した。当時、女性には医師の道は閉ざされていたが、数々の困難を克服し、明治18年(1885)、医術開業試験に合格、日本公許登録女医第



一号となり、東京の本郷湯島で開業した。その後、再婚した夫とともにキリスト教徒の理想郷建設を夢みて北海道に渡ったが、夫の病死など様々な苦難も経験した。晩年は東京にて医院を開き、女性の目線での温かな医療を続けた。

冬の利根には、吟子の不屈の精神と大いなる愛が息づいている。



荻野吟子 嘉永4年(1851)～大正2年(1913)



荻野吟子生誕の地



冬の利根

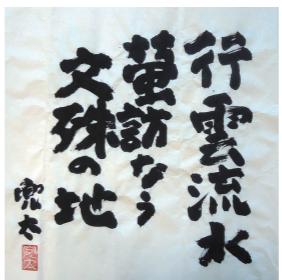
行雲流水 螢訪なう 文殊の地

【設置場所】文殊寺

(熊谷市野原623)

解説

江南地域の豊かな里山にはゆっくりとした時間が流れている。水辺には螢も飛び交い夏の始まりを告げる。野原には文殊寺があり、知恵の象徴として古くから信仰を受けている。この句はこうした江南の原風景を描写している。

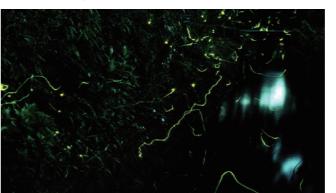


「行雲流水」とは、中国北宋代の蘇軾(蘇東坡)によって著された『宋史』を出典とし、空行く雲や流れる水のように、一事に執着せず、自然にまかせて行動することを意味している。この言葉には、空高く緑豊かな江南地域に足を踏み入れた時の感動が表現されている。

「螢」は、ゲンジボタルの自生地として知られる江南の風景へと結びつく。江南では螢の保全のための地道な活動が続けられている。

また、江南には歴史ある古刹が多く、その一つが野原の文殊寺である。早春の文殊寺では縁日が催され、新しい門出に幸あれと願う人々が多く訪れる。

四季を通じた自然の美と、歴史ある地域文化の融合が果たされている江南には穏やかな風が吹いている。



江戸時代に建立された文殊寺仁王門

《各句解説:熊谷市立江南文化財センター》

作者紹介

金子兜太(かねこ・とうた)

熊谷市名誉市民、俳人、現代俳句協会名誉会長、「朝日俳壇」選者。大正8年(1919)9月23日生まれ、秩父・皆野の地で育つ。旧制熊谷中学(現在の埼玉県立熊谷高等学校)を経て、旧制水戸高等学校在学中に句作を始める。1943年、東京帝國大学経済学部を卒業。同年、日本銀行に入行。1944年より終戦まで、海軍主計中尉、後に大尉としてトラック島(現在のミクロネシア連邦チューク諸島)に赴任。1946年に復員し日本銀行に復職する。1955年、第1句集『少年』を刊行し、翌年に「現代俳句協会賞」を受賞する。1962年、俳誌『海程』を創刊、主宰を務める。1967年、熊谷市に転居。1974年に定年退職後、俳句に専念。1983年、現代俳句協会会長に就任。1988年、「紫綬褒章」を受章。精力的に句作を進め、「詩歌文学館賞」(1996年)、「現代俳句大賞」(2001年)、「蛇笏賞」(2002年)、「日本芸術院賞」(2003年)、「正岡子規国際俳句賞大賞」(2008年)などを受賞。2008年に文化功労者。2009年、熊谷市名誉市民に推挙。2010年に「毎日芸術賞特別賞」及び「菊池寛賞」を受賞。2016年、戦後一貫して現代俳句を牽引したことが評価され「朝日賞」を受賞した。『旅路抄録』、『早春展墓』、『遊牧集』、『猪羊集』、『詩経国風』、『皆之』、『両神』、『東国抄』、『日常』などの句集のほか、『わが戦後俳句誌』、『小林一茶一句による評伝』、『日本行脚俳句旅』、『他界』などの随筆・評論も多数刊行。現代俳句の巨星として活躍を続けている。

